

も同様である。若しも「帝人事件」の勃発が数ヶ月早かったら、浪華倉庫の歴史も、私達社員の人生も大きく変っていた筈である。

(次号につづく)

あとがき

鈴木商店傘下の直系会社のうちでも、浪華倉庫は最も地味で目立たない存在であった。従って、浪華倉庫がその後どうなったか、また社員達はどうしたか等について知っている方は極めて少ないのではないかと思ふ。

私は、かねてから、それを書き残して置きたいと考えていた。そして今度やっとペンを執って書きはじめたのであるが、紙数の制約もあり、その詳細は次号に譲ることとした。ご諒承を乞う。

製糖の沿革

一、はじめに

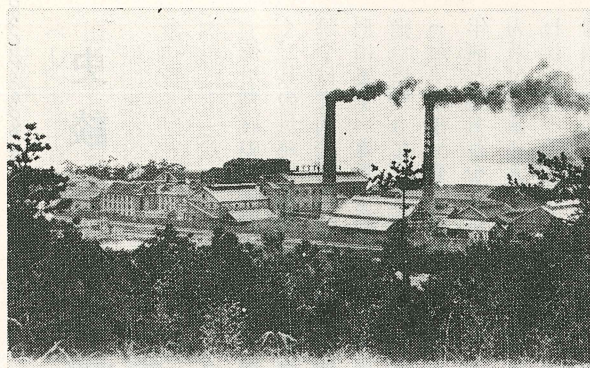
▽金子直吉と湯浅竹之助

日本製糖工業の歴史を読むとき、鬨魂たくましい二人の神戸商人の姿が浮きぼりにされてくるのは愉快である。一人は鈴木商店の金子直吉であり、もう一人は湯浅商会を起した湯浅竹之助である。

金子は明治三六年に福岡県大里に大里製糖所を起した。「金子直吉伝」によると、製糖工業には水質と水量の如何が基本的な条件になる。そのうえ海上輸送に便利で、当時のただ一つのエネルギーである石炭の入手に便利であるという立地条件を備える必要がある。金子はこうした場所をみずから探し求めて、ついに大里の大川尻に白羽の矢を立てたというが、大里といえば、別にみるように金子が後に製粉工場を建てた場

操業を開始した。溶糖能力は一〇〇英トンに達したが、これは年額八〇万ピクルの精糖能力にあたるものであった。第二工場はさらに拡張されて、大正九年七月には能力二五〇英トンにおよび、神戸は糖業界で日本有数の地位を確保したのである。

日華事変から第二次大戦中の業界の歩みは省略しなければならぬが、戦争による苦難の道は他の産業のそれとほとんど変りはなかった。神戸工場は昭和一八年一二月、企業整備令によって閉止された。機械設備は南方占領地域で現地操業をおこなうというたてまえで、その大部分が神戸港から占領地に向けて船積みされた。だが、そのときは日本の敗色はすでに明らかとなっており、積載した船舶は米軍によって空しく途中の海底深く沈められてしまった。一方、神戸工場は昭和二〇年三月一七日のB29の無差別爆撃によって焼失したが、それは続いて加えられた六月五日の大爆撃とあわせて、神戸市の大半を壊滅に陥し入れた戦災史の中のひとコマであるに過ぎなかった。



製糖所全景

景 全 所 製 大 里 戸 工 場 が 操 業 を 開 始 し た の は 昭 和 二 五 年 五 月 で あり、以 来 設 備 の 近

所でもある。この二つの企業はいずれも間もなく他に身売りされているが、両者とも鈴木商店が貿易商として三井、三菱を向うに回して世界市場を舞台に縦横活躍を遂げた有力な背後の支えとなった。鈴木商店は、のちに日本の基幹産業となった鉄鋼、造船、人造絹糸その他の領域で、先駆的な役割を果たしたことは、あまねく知られているが、大里製糖所もその一環として記録に値する存在だったのである。大里製糖所は、明治四〇年八月、大日本製糖に六五〇万円という当時異常の高値で売渡されたが、鈴木と日本製糖との関係は、以上の輸入原糖の精製事業だけにとどまらず、さらに台湾の製糖工業にも大きな足跡を残した。すなわち、台湾の東洋製糖会社は、事実上鈴木商店の支配下に属したが、この会社は鈴木没落と運命をともにして大日本製糖に併合されたのである。

湯浅竹之助は、のちに神戸に増田製粉所を設立した横浜の豪商増田蔵商店へてっち奉公し、砂糖の商売を身につけた。明治三十一年に独立の志を抱いて神戸に移り、同三四年に湯浅商会を創設して同じ商売をはじめたが、同三六年一〇月、資本金一〇〇万円を湯浅製糖所を創立した。工場は東尻池村(現長田区東尻池町)に建設し、同四一年二月に神戸精糖所と改名、操業した。能力は八〇英トンであった。この会社は、当時大日本精製糖会社と、横浜に設立された横浜精糖会社とともに、輸入原糖による精製糖業界の日本における三社時代を形成したが、明治四四年六月に台湾製糖会社に合併された。戦災で焼けてしまったが、神戸の山手に建てられた洋風の建物は市民の間で「湯浅御殿」とよばれ、彼の實力を示すものである。

二、神戸製糖工業の過去と現状

▽台糖神戸工場

神戸の製糖工業は、神戸精糖所とそれを買収した台湾製糖が、それと同社神戸工場として、明治四五年二月から溶糖を開始したことから本格化したわけである。第二工場は大正五年六月、第一工場に接して完成、

代化を完了し、現在は骨炭炉過法による清浄設備をそなえ日産六一〇トンの能力を保有するにいたった。

この間神戸工場は、戦時中から研究を重ねていたペニシリンの工業化を進め、のちにアメリカのファイザー社と技術提携をおこない、昭和三〇年六月に「台糖ファイザー株式会社」となって独立し、現在神戸の異色ある医薬品メーカーの地位を占めている。

▽名古屋製糖神戸工場

戦争によって、いちじるしく荒廃した神戸港の機能は戦前をしのぐ状況にまで発展したのは周知の事実であるが、築港の進展にともない、新たに造成された本部臨海工業地帯に進出したのが名古屋製糖会社神戸工場である。名古屋製糖会社は、昭和二一年名古屋市中に創設されたが、神戸工場ができたのは昭和二九年三月であった。能力は日産七八五トンという大規模のものであり、しかも新設工場だけに設備の近代化も十分にとり入れられた。神戸西部地帯に比べて、その立地的有利性も確保されている。かくして戦後の神戸製糖工業は、名古屋製糖工場の進出によって、いちじるしくその水準を高めたといえることができる。砂糖の統制が廃止され、自由販売が許されたのは昭和二十七年の四月であったが、この事実が製糖各社の設備拡張を大いに刺激した。その後日本の貿易および為替の自由化の線にそって、昭和三八年八月には、原糖輸入自由化が実現したが、こうした事実が重なって、各社の原糖輸入は激増し、業界は生産過剰の重荷を背負い込むことになった。そこで不況カルテルを結成して、苦境の脱出をはかったが、容易にその効果をあげることができず、過剰設備の整理は業界の当面する重要課題となって現在にいたっている。

(カットは大正時代の風刺マンガ)

ママは作家でパパは子守、女性上位は今とかわらず)

